## ②実践研究
## 『「論理・表現」でICTを活用して書く意欲を高めるには』

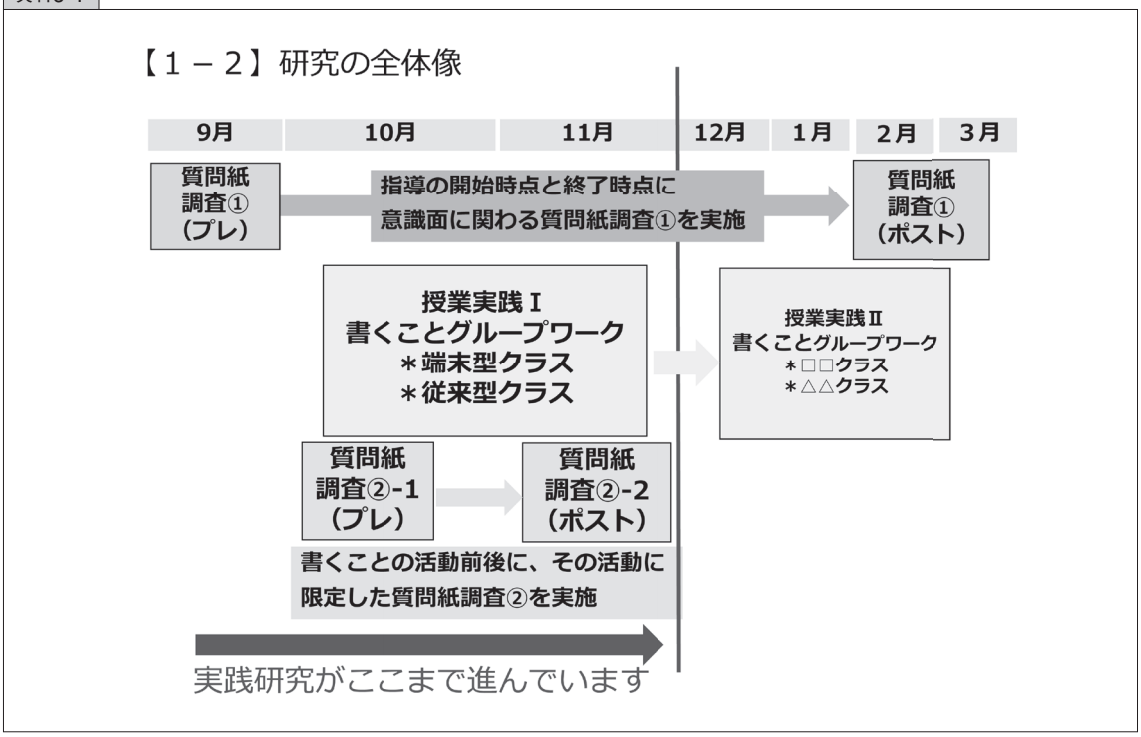
発表者・登壇者：工藤 洋路（玉川大学）／津久井 貴之（群馬大学／大妻中学高等学校）／
長沼 君主（東海大学）

**工藤先生**：第2部の後半は、実践研究の発表になります。最初に私から研究の全体像、および研究の概要と生徒の実態の報告をいたします。続けて、津久井先生から授業の実践の報告、そして最後に、長沼先生からまとめをしていただきます。

本実践研究の目的は、英語で書くことに不安や抵抗感があると思われる高校生の英語で書く意欲を向上させるために、学習や指導において、どのようにICTを活用するとよいかを探ることです。研究課題は、①ICT活用の有無や活用方法の違いによって、生徒の書く学習への取り組み方が変わるか、②生徒の学習への取り組み方の違いによって、書くことへの意識に違いが生じるか、になります。研究は今年度の9月から始まり、年度末までとしています（資料3-1）。

まず、書くことへの意欲、およびICT使用等に関するプレ質問紙調査①の結果と、授業実践Ⅰの前に行ったプレ質問紙調査②-1の結果を共有します。

資料3-1



調査は、津久井先生が担当する2クラス、74名を対象に、研究が始まる時点での生徒実態を調査する目的で35項目の質問をしました。最初の17項目は意識・意欲・信念などに関するもの、次の14項目はICTの活用に関するもの、そして、最後の4項目は自主学習、家庭学習に関するものです。生徒には、各項目について、「4.とてもそう思う」「3.まあそう思う」「2.あまりそう思わない」「1.全くそう思わない」の4つから、最もあてはまるものを選んでもらいました。この4つの回答を数値化して、各項目で平均を出しました。授業者・実践者の意識や視点を大事に、実践者津久井先生が、アンケート結果で注目した点を抜粋し、お伝えします。まず、項目3「自分の意見や考えなどを英語で書くことに抵抗感がある」は、平均値が2.41でした。よって、半数近い生徒が研究開始時の9月の時点で、「書くことに抵抗感がある」ことがうかがえました。この生徒の状況に関して、コメントをいただければと思います。

**津久井先生**：4月から週1回、非常勤で指導している高校1年生ですが、生徒たちの書くことへの抵抗感は、当初から私も気になっていました。私からのフィードバックのコメント等は楽しみにしているようでしたが、書き始める前は身構えてしまう様子がありましたし、一生懸命たくさん書いてくれますが、通じない英語を書いている生徒もおり、そこから抵抗感へとつながってしまわないかも気になっていました。

**工藤先生**：それと連動して、項目13「先生や友だちに英語で自分が書いたものを読んでもらいたいと思う」と項目14「先生や友だちに自分が書いたものに対してコメントをもらうのは嬉しい」では、2.64と3.05で少し差が見られます。ここに生じている差は、抵抗感と関係があると思われますか。

**津久井先生**：授業の終わりに生徒の書いたものを返す時に、同じようなことを感じることがあります。うれしそうにコメントを読みますが、ライティングの単元が始まると、楽しそうではなくなる雰囲気は感じています。

**長沼先生**：自ら読んでもらいたいほどの自信はないですが、友だちや先生からのコメントを読むことは楽しい。コメントを読みたいという気持ちが、書くことへの抵抗感を低下させ、協働的な作業を楽しむ風土を育てるのかもしれません。項目16「友だちが書いたものを読んだとき、表現や書き方などを真似してみたいと思う」は、まさに学び合いの風土が育まれていると思いますが、普段の授業から起こっているのでしょうか。

**津久井先生**：自分の書いた英文を近くの人に見せたり、ブレーンストーミングの段階で共有したりすることは、抵抗なくやれていると思います。

**工藤先生**：次は実践実施校でのICTの活用について、簡単に説明をお願いします。

**津久井先生**：Chromebookを使っていますが、授業で使うことは多くなく、Google Classroomで先生からの課題やコメントを生徒たちが確認する程度のようです。1学期のスピーキング活動では、パフォーマンスの撮影、見直し、友だち同士でのコメントのやり取りに使いました。

**工藤先生**：今回の対象生徒は、毎時間ICTをたく

さん使っているわけではないということですね。項目27「機械翻訳やスペルチェック機能を使うことに罪悪感がある」では、「罪悪感がある」との回答が多かったですが、どう思われますか。

**津久井先生**：私から直接は言っていませんが、生徒の翻訳機能を使ってはいけないという意識は、授業者として少しもったいなくもあり、翻訳ツールの使い方を指導できていないという点は申し訳ない気持ちがあります。

**工藤先生**：長沼先生、ほかの観点も含め、ICT関連の回答についていかがでしょうか。

**長沼先生**：罪悪感に関しますと、項目26「機械翻訳やスペルチェック機能を使えば正しい英文を書くことができると思う」の回答は肯定的で、その有能性を認識していることがうかがえます。現実世界ではこうした道具を手足の延長として使用しており、生徒が使ってはいけないと思っていること、教室で使うことがタブー視されていることはもったいないですが、英語学習において発達途上な生徒が安易に頼ってしまうことは、確かによくありません。完全な排除ではなく、上手な使い方を考える必要はあるかもしれません。

項目22「授業内外を問わず、英語で書くとき、どんな評価（点数やコメント等）がもらえるか気になる」と思う生徒の割合は高いですが、項目23「授業内外を問わず、これまで自分が書いた英文の表現や書き方をふり返って読み直すことがある」、項目31「Classroom上のコメントを参考にし、授業の予習や復習として英文を書いたり書き直したりすることがある」は若干肯定度が低いので、ICTの利点を活かして、生徒が教室外で自律的に書いたものやコメントなどにアクセスするようになるように、教師が授業で仕かけていくことが大事だと思います。

**工藤先生**：では、授業の実践内容の報告をお願いします。

**津久井先生**：実践は、非常勤でお世話になっている大妻高校の「論理・表現I」の1単位分を対象に、週1時間担当している2クラスを、ワークシートを中心とした「従来型」とJamboardを中心とした「端末型」に分け、同一単元計画を基にした指導を行いました。

これは単元計画の概要で（**資料3-2**）、使用教科書『FACTBOOK』（桐原書店）内のfair tradeの単元内容からライティング活動を設定しています。目標は、外資系企業が出店する店で、選んだ国の豆を用いたfair trade chocolateを扱ってもらえるように、提案書を書くことです。指導概要は合計5時間で行う計画で、1時間目では、動画視聴と感想共有を行った後に4か国から1か国を選び、2時間目では、選択した国の情報共有を英語と日本語で行います。3、4時間目のグループ活動では、調べたことをプリントで共有する従来型クラスと、Jamboardで共有する端末型クラスに分け、ライティング活動だけでなく、スピーキング活動も行います。3時間目は情報やメモの共有をした後、各自がライティングをし、4時間目はグループ内で互いの英文にコメントをつけて共有した後、私からのフィードバックと合わせ、ライティングを仕上げます。

端末の使用以外は、両クラスでの指導は大きく変えないようにしました。グループ活動時の班分けは、両クラスとも、事前アンケートで把握した生徒のライティングへの抵抗感の程度がミックスされる組み合わせにしました。また、書いた英文を読み合う活動の前に、書き手自身がどのような思いでその英文を書いたのかを、自分のライティングにコ

メントするように伝えました。また、リライトする回数は、できるだけ多くなるように工夫をしました。高校1年生ですので、中学校までの経験を生かして書くことを共通の工夫とし、型にあてはめるだけにならないよう、教師から型を与え過ぎないように気をつけました。

従来型のクラスでのブレーンストーミングは、メモを手書きで残し、ワークシートを使いました。端末型では、個人用に1枚とグループ（3、4人）ごとに2枚のJamboardを用意しました。他グループの内容は、データ共有で見られるようにし、個人のライティングは、構成や展開を考える段階から個人用のJamboardを使い、グループ内だけで共有し、内容や展開を参考にできるようにしました。また、生徒が授業中に画面上でどのような作業を行っているかを知れるように、画面録画をしてもらいました。録画内容を見返すと、情報収集を行うためのサイト、友だちのライティングや翻訳サイトなど、様々なページやファイルなどを行き来していることが分かりました。研究的な側面で記録しましたが、授業者として閲覧ページや途中のプロセス、学習内容を見ることができ、非常に意味がありました。

できるだけ詳細に授業記録をつけ、振り返りを残しました。従来型では、メモを英語で手書きするなど、英語を使う協働作業がスムーズに行われていました。端末型では、日本語での書き込みがやや多く、日本語の情報をもとに協働、共有が広がっていく様子がうかがえました。「できるだけ英語で」と指示はしましたが、収集した情報と自分が書ける英語にギャップがあるようでした。また、生徒が書く英語の量にも違いが見られ、ワークシートを使用した従来型は量が多めで、端末型は文を入れ替える作業が簡単にできるためか、最初に示された目安の語数に近い量に整理できていました（資料3-3）。

授業者として一番強く意識した点は、従来型は教科書やワークシートの情報に思考が制限されそうだったので、できるだけ広げる意識で、付加的な

資料3-2

## 2. 単元の指導の概要

**1　単元　FACTBOOK（桐原書店） Unit 8 fair trade**

**2　目標**

**fair trade chocolateを扱ったことのない外資系の企業が出店するお店で、あなたが選んだ国の豆を用いたfair trade chocolateを扱ってもらえるように提案書を作成しよう。**

**3　指導計画概要**

| 時間 | 主な言語活動・学習内容等 | 家庭学習や支援等 |
|---|---|---|
| 1 | 単元の概要や取組の説明<br>fair tradeに関する**動画視聴、感想共有** | ４カ国から**１つの国を選んでくる** |
| 2 | fair tradeに関する理解（**教師の英語による説明**など）**選んだ国の情報共有（英語＋日本語）** | 選んだ国のリサーチ |
| 3 | fair tradeに関する質問に英語で答える。<br>**グループ活動（情報やメモ、Jamboardの共有）** | **1回目のライティング**を書いてくる |
| 4 | **グループ活動（１回目の英文にコメント）** | **２回目のライティング**を書いてくる |
| 5 | 2回目の英文に文法や内容、場面、表現などの**教師の全体フィードバック**。 | 教師は全生徒に個別フィードバック、生徒は、**最終版（３回目）を書いて提出** |

情報を英語で紹介し、やり取りやクイズなどをしました。逆に、端末型は広がりやすいので、英語の授業の目標や英語を使う言語活動に収束させることを、英語で文を書く行為につながるようにすることを意識して指導しました。情報提供ではなく、英語で文を書く行為につながることを意識的に伝えました。

**工藤先生**：貴重な報告をありがとうございました。端末型と従来型の違いだけでなく、学習のプロセスや教師の指導のあり方が変わることもみえてきました。

研究開始時と活動直前の意識をクロス分析した結果、肯定的な変化が見られましたし、活動後は両クラスとも肯定的な回答でした。授業を担当された身としていかがですか。

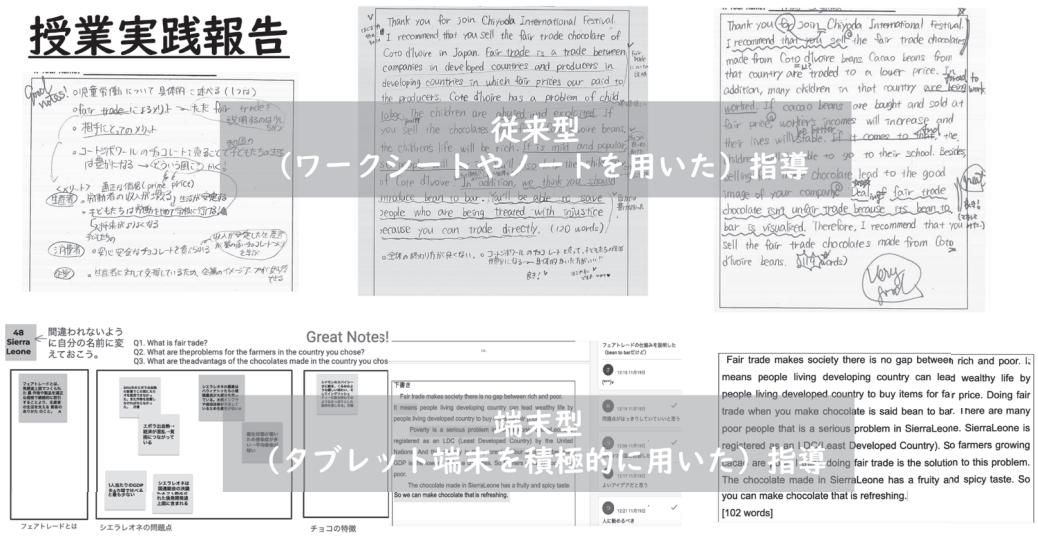
**津久井先生**：ほっとした部分もあります。研究開始時の意識調査からも、読んでもらいたいという潜在的なモチベーションはみられていたので、今回に限らずですが、できるだけ英文訂正、添削にコメントが偏らないようにしました。文が全くうまく書けていない場合は早めにサポートしますが、序盤で形式へのコメントやフィードバックを極力避けるようにしたのは、それなりに意味があったと感じています。

**工藤先生**：活動実施後のアンケート項目3「ワークシートを使って友だちとアイデアを交換したり話し合ったりしたことは楽しかった」は肯定的な回答が多く、端末型のクラスではよりポジティブでした。これをどのように捉えますか。

**津久井先生**：これまで端末やドキュメントの共有機能を使う機会が少なかったため新鮮だったことと、SNSでコメントし合うことに慣れているので、いつも使っているツールに近い形で楽しくできたことが要因だと思います。

**長沼先生**：端末型は新規性があると思いますし、その結果、「最後の作文がよく書けたと思う」への肯定的な回答が多かったのはよかったです。日本語の使用がやや多い懸念はありますが、書けたと

資料3-3




群馬大学・大妻高等学校　津久井貴之

いう意識、できる感が高まったことは、とてもよいと思いました。

**工藤先生**：研究開始時と活動直前での抵抗感の変化をクラス別に「ない・ない」「ない・ある」「ある・ない」「ある・ある」の4パターンに分け、活動後の抵抗感がどのように変化したかを比べました。活動前の抵抗感が活動後に解消された生徒が、端末型・従来型の両クラスともに一番多く、効果的なツール活用だけでなく、教師の適切な指導や協働学習等の様々な要因が重なり、最終的に抵抗感が解消されたことがうかがえます。端末の活用だけに効果が表れたわけではないということです。

学習プロセスや教師のかかわり方の視点から実践授業を振り返ると、端末型では日本語でのメモがたくさんありましたが、日本語のアイデアがたくさん出ることについてどのように感じられますか（資料3-4）。

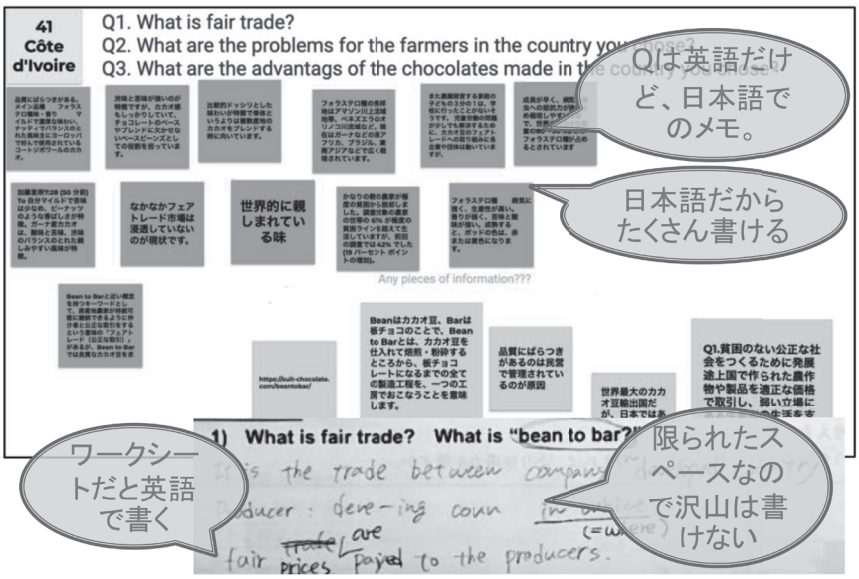
**津久井先生**：日本語での議論を目標の英文ライティングに収束させるために、情報インプットは英語のサイトを参考にするように紹介しました。しかし、これでよいのかなという違和感や危機感は変わらずにあります。

**工藤先生**：「対話的な学び」は、学習指導要領のキーワードでありますが、対話にはいろいろな解釈があると思います。母語（日本語）で、協力して活動に取り組むのも対話ですが、学校教育の中で英語を学んでいますので、英語でのやり取りによる対話的な学びを中心にしていくことは、どのように捉えていますか。

**長沼先生**：英語で英語の授業を基本とする中、日本語が増えてしまうとどうなるかは、小学校でもよく議論されています。アイデンティティーにもかかわりますし、思考をまとめる時に母語に頼ることは悪くはありません。日本語をうまく使っていける形になればよいと思いますが、母語で拡散した内容をどう英語に収束させていくかですね。例えば、英語に直しやすい日本語に整理させたり、英語で読みやすいサイトを紹介してそこから表現を借りてこさ

資料3-4

**学習プロセスや教師の関わり方など**



せたりといった支援を進めていくことも1つだと思います。何事もまずは表現してみることが大事ですので、その意味ではうまく機能したと思います。

**工藤先生**：津久井先生も生徒の広がったアイデアを丸で囲んだり、コメントを入れたりしながら、整理の仕方を伝えていました。また、アイデアが日本語で広がった時には、英語での表現方法を指導したり、表現を学ぶことができるウェブサイトを紹介したりなど、英語モードに誘導していく仕かけをしていました。英語の方向にもっていくことについては苦労されたのでしょうか。

**津久井先生**：グループワークでは従来型クラスは、英語でのインタラクションで進んでいきましたが、端末型では、想定したようには進まず、日本語の使用が多くなってしまいました。とはいえ、教師と生徒や生徒同士のペアワーク活動では、使える英語は制限されていましたが、調べたことを英語で表現しようとしていました。そこでは、読みやすく、分かりやすい英語を提示するなどの支援もしました。

**長沼先生**：生徒自身がどのようなサイトを見ればよいかを分かっていくためには、教師がサイト情報を共有してあげるとよいと思います。正確性へのコメントではなく、生徒の言語表現が広がるコメント、支援する言葉がけを心がけることも大事ですね。また、ワークシート上での切り貼り作業は技術的に難しいこともあるので、生徒から出てきたものをベースに実際に教師が整理し、動かし、見せることも効果的です。生徒の英文がどのように整理されるか見せることは、関係のないモデルを見せるよりも生徒に響き、訴えかけるものになるのではと思います。

**工藤先生**：従来型の指導からICTの活用を多く取り入れた指導に移っていくことは、ツールを使うことだけでなく、学習プロセス、指導プロセスを変えていくことでもあります。では、今後について簡単に、津久井先生からお願いします。

**津久井先生**：授業実践をする立場として、目的・場面・状況の設定の大事さを改めて感じました。

資料3-5

| | 端末型クラス（Jamboard・ドキュメント使用） | 従来型クラス（紙のワークシート使用） |
|---|---|---|
| ツールの特徴や印象 | ■ プロセスの可視化・共有がしやすい（単語・フレーズレベルでしか言語化できないアイデアも載せやすい）<br>■ 色の影響もあり、視覚的に華やかな印象 | ■ しっかり英文を書くフォーマルな学習を行う<br>■ 手書きなので、生徒の人柄が見える気がする…（手書きも捨て難い・・・） |
| 使用言語とアウトプット傾向 | ■ （事前の指示がなかったため）自然に日本語での共有になったため、多くのアイデアが出た結果、それを整理するための教師のサポートが必要になった | ■ シートでは、活動の指示や質問などが英語で書かれているため、生徒も自然に英語で書いていた |
| 協働学習の進め方 | ■ 授業外も含めて、常に共有が可能で、共有作業と個人作業が同時進行する<br>■ 生徒間でカジュアルな意見交換がしやすい（SNSの影響か） | ■ 共有は授業内で教師が指定するタイミングで行う<br>■ シートを交換し合って、個別作業でコメントを書く |
| 必要なスキル | ■ 多様な作業を一度に行うスキル（＝multi-modal） | ■ 1つの作業を集中して行うスキル（＝single-modal） |
| 指導や教師コントロール | ■ 学習状況に関する多様な情報をいつでも閲覧可能（オンライン指導）<br>■ 机間指導と画面指導のバランスが必要（教室にいるのに画面指導だけだと罪悪感がある…） | ■ 机間指導には限界があるため、提出後に個別に確認（オフライン指導）<br>■ 教室内での全体指導と机間指導のバランスが必要 |

今後に向けては、引き続き学びや思考のプロセスの共有と英語を使う機会の充実とのバランスをしっかり考えた授業を成立させていきたいと思っています。共有機能は生徒から好評ですが、コメントの活性化による共有にとどまらず、英語を書く力を伸ばすことから外れないように気をつけたいです。本研究の後半の授業実践では、生徒のライティングへの抵抗感も減らし、もっと書いてみたい気持ちにつなげていきたいです。

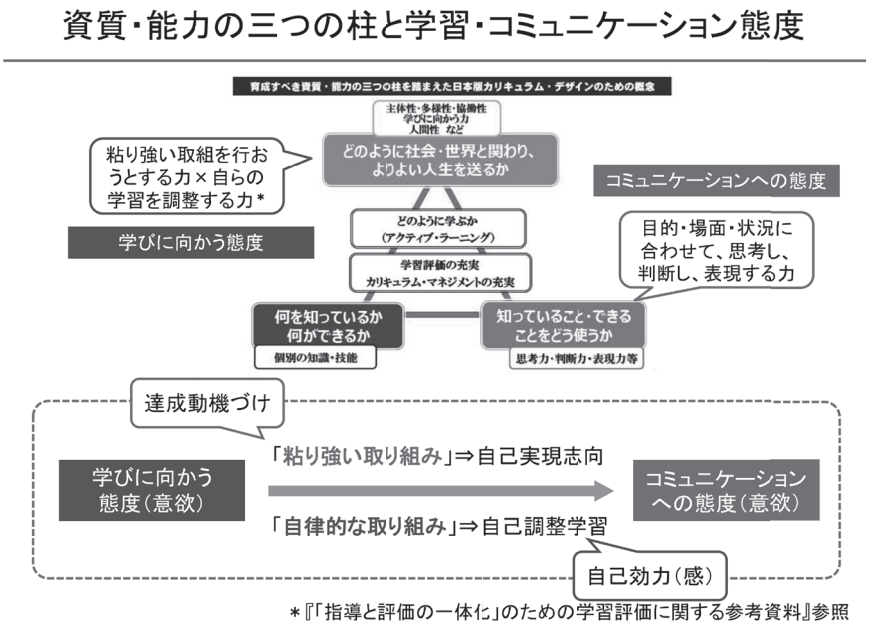
**工藤先生**：研究は2月まで続きますが、ここまでで見えてきたことをまとめましたので、ご覧ください（**資料3-5**）。

本来ICTは効率化や時間短縮につながるツールですが、ICTを活用すると学習プロセスなどの得られる情報が増えるため、増えた情報を処理するという新たな難しさも出てきます。全てのプロセスを把握すべきか、ICTを使いながら今後、考えていく必要があると思います。では長沼先生、まとめをお願いします。

**長沼先生**：今回の実践研究では、書くことへの抵抗感を下げ、書く意欲を高めることを狙い、従来型と端末型の授業を比較しました。ICT活用の工夫の前に、どちらの授業でも学びを促す工夫、書き手の学習方略の共有や自律性を高める工夫がされていました。また、教師の応答的、共感的なコメント、支援する言葉がけが上手で、ピアフィードバックでもコメントをしてほしいところに焦点があたっていたので、読んでもらえてよかったという気持ちが育ったのだと思います。教師や友だち、個人とのつながりをコミュニケーションで保障してあげることの重要性を改めて感じました。特定の相手に読んでもらいたいという個人的なコミュニケーション意欲が、課題への興味づけと合わさり、意欲をかきたてたことがキーになったと思います。

全体的に協働的な学びに基づいた思考の整理や個別最適化がうまくできていましたし、端末型では、個人的・協働的な思考を広げながら整理もできており、付加情報の提示や共有がしづらい従

資料3-6



来型では、思考を広げる工夫をしながら収束させていくことも同時に意識されていて、よかったです。

次の表は、育成すべき資質・能力の3つの柱と学習・コミュニケーション態度を示したものです（資料3-6）。

コミュニケーションへの態度は、目的・場面・状況に合わせて思考・判断をし、表現する力と関連していると考えられます。それに対して学びに向かう態度は、コミュニケーションへの態度を前提とした学びに向かう力、態度、意欲であり、そこには粘り強い取り組み、自律的な取り組みの2つの側面があります。よりよくしたいという自己実現思考等の達成動機を培う必要がある一方で、自ら学習を調整する力、自己効力感、使ってみてできた感覚をいかに醸成していくかが重要になります。

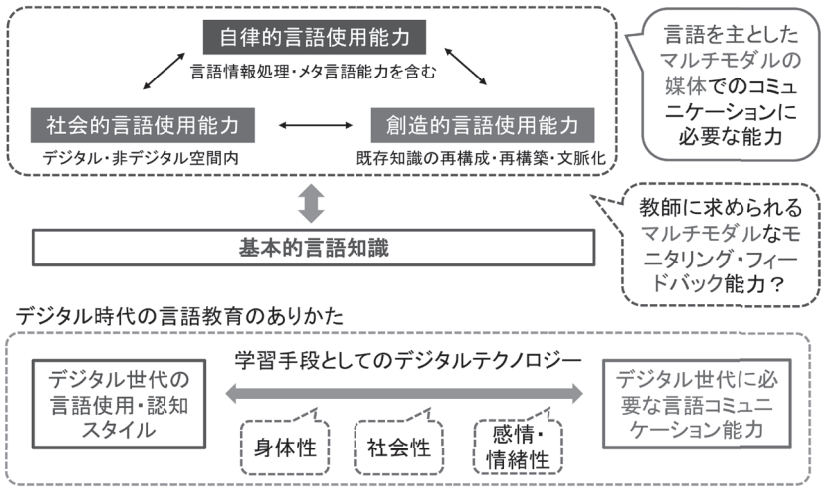
バトラー後藤　裕子先生の著書『デジタルで変わる子どもたち』（ちくま新書）では、このデジタル時代に必要な言語コミュニケーション能力は、言語を主としたマルチモーダルな媒体でのコミュニケーションと定義されています。しかし、教師がマルチモーダルな教室で、モニタリングやフィードバックを行うことは大変です。クラスとICTの活用状況を同時に見て、管理しながら、適切なフィードバックを個別最適に行うために、今後はマルチモーダルな能力を生かした教師になっていく必要がありそうです。また、学習手段としてのテクノロジーを使っていくにあたり、身体性、社会性、感情・情緒性が失われないよう、担保することも忘れずにいたいと思います（資料3-7）。

さらには、CEFR Companion Volumeに示されるように、インタラクティブなオンラインでのライティングは、メッセージの余剰性、正確な伝達と確認等のICT特有の能力が必要だと言われていますので、この部分への議論は今後さらに必要になると思います。以上です。

**事務局**：最後に本日のまとめを和泉先生からお願いいたします。

**和泉先生**：皆さんどうもありがとうございました。話

資料3-7




バトラー後藤（2021）『デジタルで変わる子どもたち―学習・言語能力の現在と未来』より改編

が多岐に及んだので、最後にまとめるのは難しいですが、ICTに関連して思うことは、生徒は新しいものが好きで、興味があるということです。ただ同時に、すぐに飽きる傾向がありますので、興味をもたせ続け、飽きないようにするために、どのような中身にし、どのような工夫をするのか、目的、目標、目指したい児童像・生徒像、つけたい力を考えた上で、手段としてICTをどう使っていくかが重要だということを改めて思いました。

All Englishに関しても似たようなことが言えると思います。All Englishの授業の重要性を主張する際、日本語が入ることは好ましくないと捉える意見があります。しかし、時々日本語を使用することで、場の雰囲気を和らげたり、生徒の気持ちをホッとさせたり、英語で多少曖昧だった部分をストンと落とし込めたりする上で、とても有効な手段となります。目指すべきは“All English”の授業ではなく、“English Rich”な授業をつくることと言えるでしょう。言語と内容ともに豊かな授業を創造していくことが大事です。これはICTの活用においても同じで、ICTをとにかくたくさん使えばいいのではなく、ICTに助けられてつくり上げる、English RichでCommunication Richな授業の創造が大事です。今後もその目的を見失わずに、ICTの使い方を考えていくべきでしょう。

教師は、AIロボットでは補えない役割を担っています。ICTが助けてくれることもたくさんありますが、“使われる”のではなく、“使っていく”立場でありたいと思います。教師はfacilitatorとして、様々な準備をする縁の下の力持ちであり、場の雰囲気づくりの立役者です。活動を導入し、つなぎ、流れを調整し、学習の意味づけをして、振り返りを促し、それをまたさらに次の学びへとつないでいく重要な存在です。その意味で、教師は「総合芸術家」「総合演出家」とも言えるでしょう。私が強調したいのは、究極的に授業は教師で成り立っているということです。ICTは手伝ってくれますが、あくまでもツールです。「生徒にとって最大の教育環境は、教師である」との言葉があります。これを最後のまとめの言葉として、私からのメッセージとしたいと思います。皆様、今日はどうもありがとうございました。